

日本環境文化史に関する研究（その11）

姥捨と山姥の関係性

稲場 紀久雄

目次

- 第1節 姥捨と山姥の関係性に関する仮説
- 第2節 姥捨考―地名から迫る異次元世界
 - 2-1 三つの地名「デンデラ野，デンデーロ，蓮台野」
 - 2-2 意味の共通性
 - 2-3 「姥捨」と異次元世界
- 第3節 山姥考―民話から迫る異次元世界
 - 3-1 三つの民話「口のない山姥」
 - 3-2 内容の類似性と異質性
 - 3-3 「山姥」と異次元世界
- 第4節 考察・姥捨と山姥の関係性
 - ―異次元世界の消滅の意味―

第1節 姥捨と山姥の関係性に関する仮説

「姥捨」と「山姥」との間には何らかの関係性が潜んでいるのではないか。

これは、一つの仮説だ。これら二つの言葉には、少なくとも私達の潜在意識に染みついた異次元世界（これは必ずしも異界を意味しない。「姥捨」も「山姥」も共に対象が女性であるという意味で、異界と表現することで誤解を生じることを恐れる。）への畏敬や恐怖が混じり合った不思議な気持ちが染みついているような気がする。

このような仮説を立てたのは、もう随分以前のことだ。私は、この10数年、何度も山梨県の丹波山村を訪ねた。この村の背後にそびえ立つ急峻な山地を登りつめた峠の尾根道は、「デンデーロ（天平）」と呼ばれている。私は、この地名に興味を持ち、その語源を考えた。そして、結論的に「デンデーロ」という地名には「姥捨」が深く関

わっていることに気がついた。

丹波山村には、奇しくも姥捨伝説があり、比丘尼という所には明治の頃、老婆が一人でひっそりと住んでいたという小屋の跡も残っている。丹波山村を何度も訪ねるうちに、私と村人との親交も深まって、村の古老の一人・木下勲氏がデンデーロとその奥地に由来する民話『口のない山姥』を聞かせて下さった。私は、こうした一連の事実から、姥捨と山姥とは深い関係性で結ばれているに違いないという心証を持つに至った。こうして、先の仮説が誕生した。

私は、民話の中で「山姥」が死んだり殺されたりすることによって、人間世界から異次元世界が消滅し、「姥捨」という行為も無くなったと考える。しかし、それは同時に<その是非はともかくも>人間の心から異次元世界に対する畏敬と恐れが消滅したことを意味する。この消滅が人間界（この世）にどんな影響を与えたのか。この疑問も、極めて重大と言わねばならない。

第2節 姥捨考―地名から迫る異次元世界―

2-1 三つの地名「デンデラ野、デンデーロ、蓮台野」

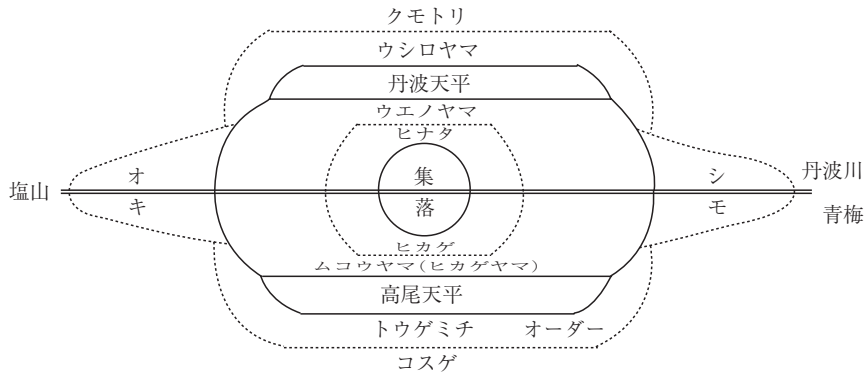
デンデラ野は岩手県遠野市の姥捨の地として有名な野原の地名、デンデーロは多摩川上流の山梨県丹波山村に残る地名、蓮台野は京都市北西郊の宮本武蔵の決闘の場として有名な場所の地名である。私は、丹波山村に伝わる「デンデーロ」という地名の語源を考察する過程で、これら三つの地名の意味の共通性に気がついた。

丹波山村は、多摩川の源流地域の一角をなす寒村で、東京都に隣接した山梨県側に位置する。急速に過疎化が進み、今では人口が千人を割っている。集落は、丹波川の兩岸の狭隘な場所に集中し、急峻な山地に囲まれた、いわゆる日陰の村である。時には鹿や猪が出没し、山地には熊がいる。比較的傾斜の緩い山腹は畑になっているが、お世辞にも収穫が豊かとは言えない。かつての遠野市との類似性は極めて高いと考えられる。しかし、京都市の蓮台野とは似ているのだろうか。実は、似ていたのだ。理由は後述する。

遠野―丹波山間、丹波山―京都間の距離は、ほぼ同じ（約500 km）で、総延長は1000kmにも及ぶ。このことから、三つの地名の意味の共通性に潜む思想は、わが国全体をカバーする普遍的なものと考えても良いのではないだろうか。

2-2 意味の共通性

多摩川源流域（山梨県側）には、日本文化の基層をなす縄文的要素が色濃く残されている。理由の一つに、アイヌ語で解釈すると意味がよく分かる地名や言葉があること。丹波山村では丹波川（多摩川のこの地域の名称）の上流を「オキ」、下流を「シ



図－１ 丹波山村の土地利用の模式図（「丹波山村誌」より）

モ」と言う。何故，上流を「オキ」と言うのだろうか。

アイヌ語を適用すると，この言葉は「オ（o）」と「キム（kim）」の合成語と考えられる。前者は「川尻」を，後者は「(里に対する) 山」を意味する。つまり，「オキ」とは，この村から見て山側の川尻を意味するわけである。一方，「シモ」は「シノ（sino）」という言葉がなまったもので，「本当の」川，つまり本流を意味する形容詞ではなかったかと考えられる。

「デンデーロ」とは図－１の「天平」のことである。「デンデーロ」にこういう漢字を当てはめているのだ。ここは，元はこの村の茅（かや）刈り場であった。

この言葉から遠野市に伝わる「デンデラ野」という地名が連想される。デンデラ野とは60歳になると姥捨が行われたという伝承地で，明治初期まで実際に機能していたらしい（『遠野物語』を歩く』，72頁，講談社）。余談だが，「遠野」という地名は，アイヌ語で「湖（あるいは沼）」を意味する。はるか昔は大きな湖があったらしい。「デンデーロ」と「デンデラ野」を濁音でなく清音で読んでみる。古代にあっては濁音を嫌ったからだ。すると，前者は「テンテーロ」，後者は「テンテラノ」となって，いずれも「テンタイラ」に通じる。そこで，この「テンタイラ」にアイヌ語を適用してみる。結論を言えば，この言葉は「タン」，「タイ」，「ラ」と言う三つの言葉の合成語ではないか。全体の意味は，「この森の低い所」ということ。山の斜面に広がる村里に近い森の入口辺りを意味する言葉のようだ。おそらく，そこは神の領域と人のそれとを繋ぐ境界領域であり，そこからは村里，つまりこの世がよく見えるのである。言い換えると，あの世とこの世を橋渡しする遷移領域である。老人は，自分の意思でその境界に登り，この世の幸せを祈りつつ，あの世に向かう日を待ったのであろう。私は，遠野市のデンデラ野を訪ねたことがあるが，そこからは村の様子がよく見えた



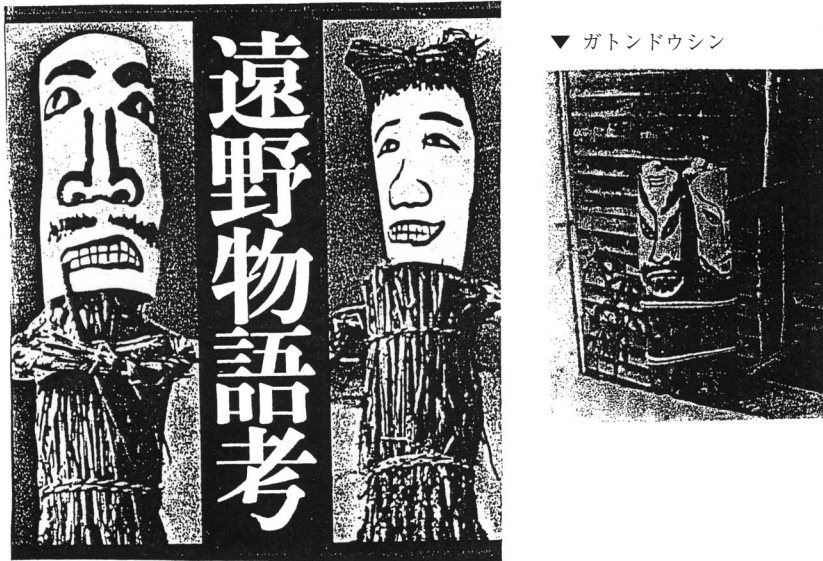
写真 サンノードワ（山王沢）で中川翁の霊を呼ぶ神主

ことを今も鮮明に記憶している。「姥捨」という言葉は、現世に残される人々の負い目を含んだ言葉である。この世を去る当事者としての老人側から考えると、「捨てられる」のではなかったかもしれない。あの世に一步近付いたわけだから、むしろ透明な明るさ、あるいは軽やかな喜びのようなものがあつたのかもしれない。奥多摩の人々が山の神とあがめる中川金治翁を奉る祠がデンデーロの一端・飛龍山の山道の入口で、サオラ（竿裏）峠という急峻な山腹を登りきった所にある。中川翁奥多摩入山百年を記念し、昨年（2002）9月14日神主さんに翁の霊を呼び下ろしてもらった。神主さんは、体力的に急峻な登りに耐えられぬと、「山王沢（サンノードワ）」というサオラ峠の登り口で霊を呼んだ。その場所は、村里と山の境界らしかった。呼び方は、「オーイ、オーイ、オーイ」と三度長く呼ぶだけ。印象としては宮沢賢治の『狼森と笹森、盗森』に出て来る光景とよく似ていた。

山は、そもそも聖域と受け取られていた。森の入口辺りは、人間界である村里にも神の世界（あの世）である深山にもつながる特別の遷移領域であって、そこは人間の言葉が神の世界に伝わる場所なのであろう。

私は、遠野物語研究所の水原義人氏に「デンデラ野」の語源を尋ねた。

同氏は、「柳田国男が『デンデラ野』に『蓮台野』という字を当てています」と答えた。京都の船岡山の西方に広がっていた原野は、かつて「蓮台野」と呼びならわされていた。この地は、はるかな昔は葬送の地として骸が横たわっていたと伝えられ、今も「上品蓮台寺」という名利があつて、「蓮台野」の名をとどめている。この原野は、宮本武蔵が慶長9年（1604年）剣客・吉岡清十郎と決闘した場所として有名である。この辺りの地形は、私には先に述べたアイヌ語による解釈の内容にふさわしいもののように思える。それに、京都は、かつては沼沢の地だったと聞く。仮にそうだと



図ー２ 遠野市に伝わる厄除けの藁人形と丹波山村のガトンドウシン

すれば、京都にもいわゆる姥捨の地はあったのだ。

賀茂川・鴨川は、アイヌ語では「カムイ（神）の川」であるように、蓮台野もまた「デンデーロ」のような言葉にそれらしい漢字を当てはめたものなのではないか。

後日、私見を水原氏に伝えたところ、「デンデラ野＝天平」説に示唆を受けたという返事をいただいた。丹波山村で正月に各家の玄関に飾られる「カトンドウシン」という人形と遠野市に伝わる厄除けの藁人形とは、よく似ている。これらは、形こそ違えアイヌ民族に伝わるイナウなどとも共通点があるように思える。いずれにしても、私には遠い縄文の伝統が継承され続けて来たものと思えてならない。

最後に、多摩川源流域にも湖とおぼしき沼や大きな池があったことは間違いない。丹波山村の隣の小菅村には、かつて大きな沼があった。さらに、私は源流の笠取山の山頂直下に湖があったと考えている。そこは、今は高山植物が咲き誇る高原である。奥多摩源流域は、アイヌ民族の伝承を遺す縄文的空間を今に伝えているようだ。

2-3 「姥捨」と異次元世界

デンデラ野、デンデーロ、蓮台野という三つの地名は、「この森の低い所」、即ち「山の斜面に広がる森の入口辺り」を意味し、そこは姥捨の地でもあった。

この場所は、人の里（この世）から神の里（あの世）にゆるやかに変わる離脱の里（この世とあの世とが交流する場）とみなしても良いのではないか。離脱の里は、人と神とが交流できる中継の、あるいは橋渡しの場所で、次元がこの世より一段高く、

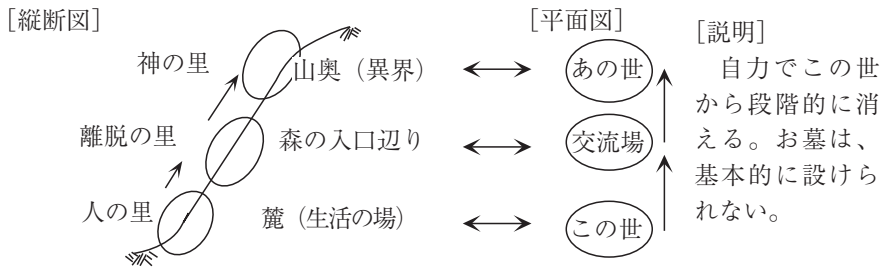


図-3 この世からあの世への移行プロセス

あの世より一段低い異次元世界なのである。この関係を里と山に適用すると、人の里は麓に、神の里は山奥に比定され、離脱の里はその中間、つまり森の入口辺りに位置することになる（図-3）。

人間は、誰でも等しく離脱の里を越えない限り、あの世には行けない。山を畏れる一方で、聖なるものとみなし、神を奉る習俗はこうした思いを基にしているわけである。このように考えると、離脱の里は、「能舞台」に近い。能舞台は、あの世とこの世の交流の場となり、演じ終われば演者は静かに去って舞台は鎮まる。全ての人間がいずれはこの離脱の里に行かなければならず、その事を当事者本人が一番よく自覚している。さすれば、「姥捨」はその行為のこの世側から見た一面を表現した言葉であると言えるだろう。奥多摩山中には（戦前のことだが）自ら世を捨てて暮らす老夫婦の記録がある（田島『山行記』95頁、大正15年）。

場所は天目山の山頂付近で、標高1700メートル。小屋は三坪足らず、屋根は低く、床はなく、土間に暖炉があるだけ。そこに、70歳位の老爺と髪を蓬のように乱した50代の女性とが暮らしていた。彼等は、山中の原野に茂る萱を原料に炭俵を作って生計を立てていた。まさに浮世を超越して、自らの死を、否、自らの生を凝視しつつ、一切の欲望から離脱し、自然に抱かれて日々を過ごしていたわけである。

死は、彼等にとっては自然との合一であって、決して恐ろしいものではなかったのではない。「姥捨」の当人の気持ちは、どんなものだったのだろうか。おそらく、当人は死のその瞬間まで懸命に生きたことだろう。そして、さらに高い次元の世界に登って行ったのであろう。

今でこそ人間の誕生の99.9%が、死亡の93%が病院で取り仕切られる。人々は、近親者であっても、その生の瞬間、死の瞬間（の荘厳さ）をほとんど、あるいは全く見る事がない。生と死の瞬間は、いわゆる専門家の手中にあり、関係者にさえ隠されることが多い。しかし、三つの地名が生きた意味を伴って使われていた時代（おそらく

何百年、あるいは千何百年よりもっと前）は、現代とは対極にあっただろう。

人々は、いやおう無しに死と直面し、死の覚悟を持たざるを得なかった。向う側の世界（あの世）が不断に意識されていた。だからこそ逆にこちら側の世界（この世）で如何に生きるべきかという問題意識も深かったに違いない。

私もまた、昨秋、姉を肺ガンで失った。死を受け入れた姉は美しかった。自らの死を凝視しつつ、「生きていることは、どんな形であれ、ありがたいこと」と言い、私にも心を配ってくれた。私は、愛の形をこの時悟った。

本節の最後に付け加えておきたい。山奥を「異次元世界」として畏れ敬う気持ちについてである。宮沢賢治の『なめとこ山の熊』では、熊が住む山奥は神の里、淵沢小十郎が住み、かつ熊と戦う場が離脱の里、そして小十郎が商人にへつらい、しかも命懸けで捕った熊の毛皮が買ったたかれる場が人の里である。賢治は、このように三つの世界を図式化する。淵沢小十郎の命は、最期は熊に捧げられ、神の里に奉られる。熊の遺骸の一部である毛皮は、お金と交換され、人の里で利用される。賢治は、熊の住む山奥を命を捧げる神聖な異次元世界として描いている。生命を犠牲にしてしか生きられない人間の哀れさ。この構図は、日本人の心奥に深く根差したもののなのだ。

第3節 山姥考－民話から迫る異次元世界

3-1 三つの民話『口のない山姥』

私は、丹波山村の古老・木下勲氏（72歳）から『口のない山姥』という不思議な民話を聞いた。木下氏がこの話をして下さったのは8月22日（2003年）朝のことで、私達は天平（デンデーロ）の尾根筋から比丘尼を経て下山する途中だった。

比丘尼は、明治の頃のことと思われるが、老婆が一人で暮らしていた小屋のあった所で、今も根太は残っているはずだという。姥捨に遭った人かもしれないということだ。デンデーロの尾根道は、所々にかなり背の高いツワブキが自生しており、比較的平坦で開けている。畑が出来ないわけでもないと思える。山菜が豊富な所で、かつては蕨の採集地だったらしい。比丘尼の近くでは沢水も得られる。知識さえあれば、山は豊かな恵みを人々に惜しげなく授けてくれたのだ。

しかし、デンデーロを境にして丹波山の集落と反対側の山地は、どこまでも続く奥深い山であり、村人にとっては今なお畏敬の対象であることには変わりない。木下氏は、比丘尼を過ぎ、山を下り始めた頃、明治五年生れのお爺さんから子供の頃に聞いた『口のない山姥』の話を思い出し、私に話す内に次第に興が乗って、急斜面を下りつつ一気に話して下さった。

比丘尼から集落までの斜面は、大変急だが、注意して見ると随所に石垣が築かれ、



写真 ツワブキが自生するデンデーロの尾根筋

かつては狭い耕地が沢山作られていたようだ。一つ一つが小さな小さな畑であったのだろう。今ではそこに杉が植えられ、かなりの樹木に成長している。おそらく、昔は耕してデンデーロの尾根に至るといった状態だったことは間違いない。かつての光景を想像すると、窮乏した村の食料事情がしのばれる。

私は、木下氏の話に引き込まれ、その全容を直ぐに記憶した。彼の話した『口のない山姥』の大筋は、次のようなものだった。

木下 勲氏談『口のない山姥』

貧しく食べ物も乏しい村に『食べる口が増える』と幾つになっても嫁を迎えない男がいた。ある時、山の中に口のない女がいると聞いた男は、その女をぜひ妻にしたいと考えた。男は、山の中を探し回り、ようやく女を見つけて村に連れて来た。男は、女を妻にして暮らしていたが、口がないはずなのに食べ物が減る。

男は、不思議に思い、ある日、ソォーッと（戻って来て）天井の梁の陰から女の様子を見守った。女は、『家には誰もいない。今のうちに飯を炊こう』と、楽しげに飯を炊き始めた。そして、握り飯（おむすび）をいっぱい（一杯）作り、髪をかき分けた。すると、どうだ。大きな口があるではないか。

あまりの恐ろしさに、男は梁から落ちてしまった。女は、「気づかれては仕方がない。いっそ、この男も食べてしまおう。」と男をつづら（葛籠）に入れ、背負って、女の住んでいた山に登って行った。さんだ（長い時間）山道を登り、女は疲れたのか大きな木の根元に休んで、そのまま眠ってしまった。

男は、ソォーッとつづらから出、自分と同じ位の石を衣に包んでつづらに入れ、その木に登って隠れていると、女は眼を覚ました。そして、そのまま、「休んだら軽い

な、休んだら軽いな」と言いながら、山に向かって行った。女は、山姥だったのだ。

ほうほうの体で村に戻った男は、名主様に相談した。

名主様は言った。

「山姥は、必ず戻って来て、お前を食べてしまうだろう。助かる方法はただ一つ。大きな釜に湯をわかせ。」

男は、言われるままに湯をわかした。すると、どうしたとか、天井から一匹の蜘蛛がスーッと降りて来た。

名主様は叫んだ。

「その蜘蛛こそ山姥だ。早く釜の中に入れて蓋をしろ。」

男は、素早く蜘蛛の糸を切り、煮えたぎる釜の中にたたき落として蓋をかぶせた。こうして山姥は、死んでしまったとさ。おしまい。

木下氏は、現在72歳である。10歳位の子供の頃に聞いたとすれば、62年前になる。木下氏に話した人は、お爺さんだ。当時70歳位だったとして、お爺さんがこの話を聞いたのがやはり10歳位だったとすれば、120年位前。さらに、お爺さんに話した人が何時、誰から聞いたのかは分からないが、この民話は江戸時代末には丹波山村に存在したことは間違いないだろう。当時の丹波山村は、陸の孤島と言っても良いだろう。この民話の背景には厳しい食料事情がある。デンデーロと比丘尼は、姥捨の噂が残る地であった。私と木下氏の二人がまさにその地を歩いていた時に、木下氏がこの民話を思い出したのだ。これは、不思議な符合と言えるだろう。

ところで、「デンデラ野」のある遠野市と「蓮台野」のある京都市に同じような民話が伝わっていないだろうか。実は伝わっていた。遠野市でも京都市でも、タイトルは『食わずの女房』あるいは『食わず女房』となっているが、内容は良く似ているのである。

3-2 内容の類似性と異質性

丹波山村の『口のない山姥』のストーリーと遠野市と京都市の『食わず女房』のそれとを比較してみよう。

・丹波山村の『口のない山姥』

- (1) ある男が口のない女が山中にいると聞き、妻にすると都合がよいので自分で探し出して家に連れて来る。
- (2) 女は、口がないはずなのに食べ物が減る。男は、不思議に思い、天井の梁の陰から女を監視する。
- (3) 女の頭髮の中に口が隠されており、食べ物を食べる姿の恐ろしさに男は梁か



図－4 頭の真ん中の大きな口
 (『くわずにようぼう』, 絵・梶山孝明, ふるさとの民話18, 世界文化社)

ら落ちる。

- (4) 女は元の山姥となって男をつづらに入れ、山の中の家に帰ろうとする。
 - (5) 男は、途中で山姥が疲れて眠ったすきに逃げ出す。
 - (6) 山姥は、家に帰った男を食い殺そうと、蜘蛛に変身して現れる。
 - (7) 男は、蜘蛛を熱湯にたたき落とす。山姥は死ぬ。
- ・遠野市の『食わずの女房』(「遠野むかしばなし：鈴木サツ自選50話」より)
- (1) ある女が「飯を食わないから女房にしてくれ」とある男を訪ねて来る。そこで、その男は「飯を食わない」という条件をいれてその女を女房にする。
 - (2) 丹波山の(2)とほぼ同じ。
 - (3) 丹波山の(3)とほぼ同じだが、男は素知らぬ顔で、そのまま寝る。女は、夜中に腹痛を起こす。そこで、男が「食べ過ぎのたたりだ」と言う。
 - (4) 女は、正体を知られたと山姥に戻り、籠に男を入れて、山の中に帰る。
 - (5) 男は、すきを見て逃げ出す。
 - (6) 山姥は、恐ろしい姿で男を追いかける。男は、菖蒲とヨモギの中に隠れる。

菖蒲とヨモギは、魔除けの役割をする。

(7) 山姥は、隠れた男を見つけることが出来ず、去って行く。

・ 京都市の『食わず女房』（「ふるさとの民話18」より）

(1) 遠野の（1）とほぼ同じ。

(2) 丹波山の（2）とほぼ同じ。

(3) 丹波山の（3）とほぼ同じだが、男は素知らぬ顔で、「里へ帰れ」と言う。

(4) 女は、正体を知られたので、風呂桶に男を入れて、山の中に帰る。

(5) 遠野の（5）とほぼ同じ。

(6) 女は、元の鬼女（山姥と言っても良い）に戻り、蜘蛛に化けて男を捕まえることにした。

(7) 男は、現れた蜘蛛を囲炉裏の火の中に落して、殺してしまった。

これら三つの民話の間で、共通しているのは、男は自己本意な身勝手な行為に対し恐怖という罰は受けるものの、全て生き長らえることである。私は、この点には行為の理不尽さに照らして釈然としない。

ストーリーの展開で、決定的に異なる点は、次の二点である。

第一点は、丹波山の民話では、男が女を探し出して連れて来る。遠野と京都では、女の方から訪ねて来る。丹波山は目的に対して能動的、遠野と京都は受動的である。

第二点は、丹波山と京都では山姥が抹殺され、遠野では生き残る。

3-3 「山姥」と異次元世界

口のない女こと山姥は、異次元世界である山中からこの世に降りて来る。彼女は、食べ物を食べないという条件で、自己本意で身勝手な男の家に住むことを許される。ところが山姥は、異次元世界に身を置くものの、生身の存在であった。だから、食べずにはいられない。山姥は、つまり嘘をついたわけだ。そこで男は、山姥を追い出しにかかる。男の理不尽さに対する罰は、恐怖の体験。ところが、山姥が男を騙したことに対して加えられる罰は、京都と丹波山では山姥の抹殺だ。山姥は、異次元世界からやって来たので、蜘蛛に変身する超能力すら持っているのに、罰の大きさが男のそれに比べてあまりに大きすぎる。京都の場合、男は受け身だが、丹波山では男が自分で探して連れて来た。丹波山の男の罪は、能動的な分、深いはずである。ところが、丹波山の男の罰は、京都のそれと余り変わりがない。ここで、注意すべきは、山姥の死は、異次元世界の消滅を意味することだ。ところが遠野では男はこの世に、山姥は山の中に戻る。つまり、異次元世界が存続し続けるわけである。

第4節 考察・姥捨と山姥の関係性－異次元世界の消滅の意味－

はるかな昔、年老いた一人の女性（男・女を問わず老人と置き換える方がよいだろう。）が静かに我家を離れて、山に登って行った。充分には働けなくなった自分の死期を悟った彼女は、あの世の少しでも近くで死にたいと思っていた。それに、何よりも家族の負担にはなりたくなかった。彼女は、家族を心から愛していた。森の入り口辺りは少し拓けていて、そこからは村や我家の様子が見えた。彼女には、まだまだ断ち難いこの世への思いが残っていた。そこで、少し拓けた所に簡単な小屋のようなものを作り、しばらくそこに止どまった。そこは、猪や熊や鹿が出没する場所だった。だが、小鳥もヤマネやオコジョもいて、天気の良い日には様々な小鳥達が鳴き交わした。獣達も決して年老いた女性を襲うようなこともなかった。彼女は、気が向いた時には、ふらっと我家に戻ることもあった。食料事情は、厳しいとは言え、飢饉の時ばかりではない。山は、豊かな恵みを与えてくれたし、勤勉に働けば、自分一人食べて行くことは出来た。一人の女性が食べる量などしれたものだ。それよりも、自覚的に死ぬことの方が大切だった。やがて、自分の死期がいよいよ間近に迫ったことを自覚した女性は、森に分け入り、高みへ高みへと自分の力の及ぶ限り登って行った。そして、力尽きて倒れた。そこが彼女が到達したあの世への入り口であった。彼女は白骨化し、体は大地に合一した。深山は生命を投げ出す場所であり、畏敬に満ちた聖域だった。そもそも大地の性は、あらゆる生き物を生み出し、育む女性である。姥捨も山姥も女性でなければならない理由がここにあるのではないか。

彼女の家人は悔やみ、それが負い目になった。年老いた彼女を捨てたのだと。家族から愛されていた女性は、また家族を愛するが故に自ら異次元世界に去って行ったのだけれども、家人の心に深く残った負い目は、生涯離れなかった。彼女が愛したこの家で死を迎えさせてやりたかった。家人の思いは、異次元世界の消滅に向けた願望となった。しかし、一方で、女性は深い山奥でこの世を去ったとは言え、そこは鳥や獣のような異類が支配する場所だった。女性は、異類達と同化したのではないか。さすれば、自分達に災いをもたらすこともあるかもしれない。もともと負い目を持っている家人達は、密かに恐怖した。こうして、深山に住む山姥の話が生まれた。それは、あくまで空想上の話だが、現実には時に頭髪をヨモギ（蓬）のようにした老婆が山深く住んでいたこともあったのだ。この現実が空想に重なって、山姥の存在は現実味を増した。姥捨と山姥とは、こうしてしっかりと重なり合ったのである。

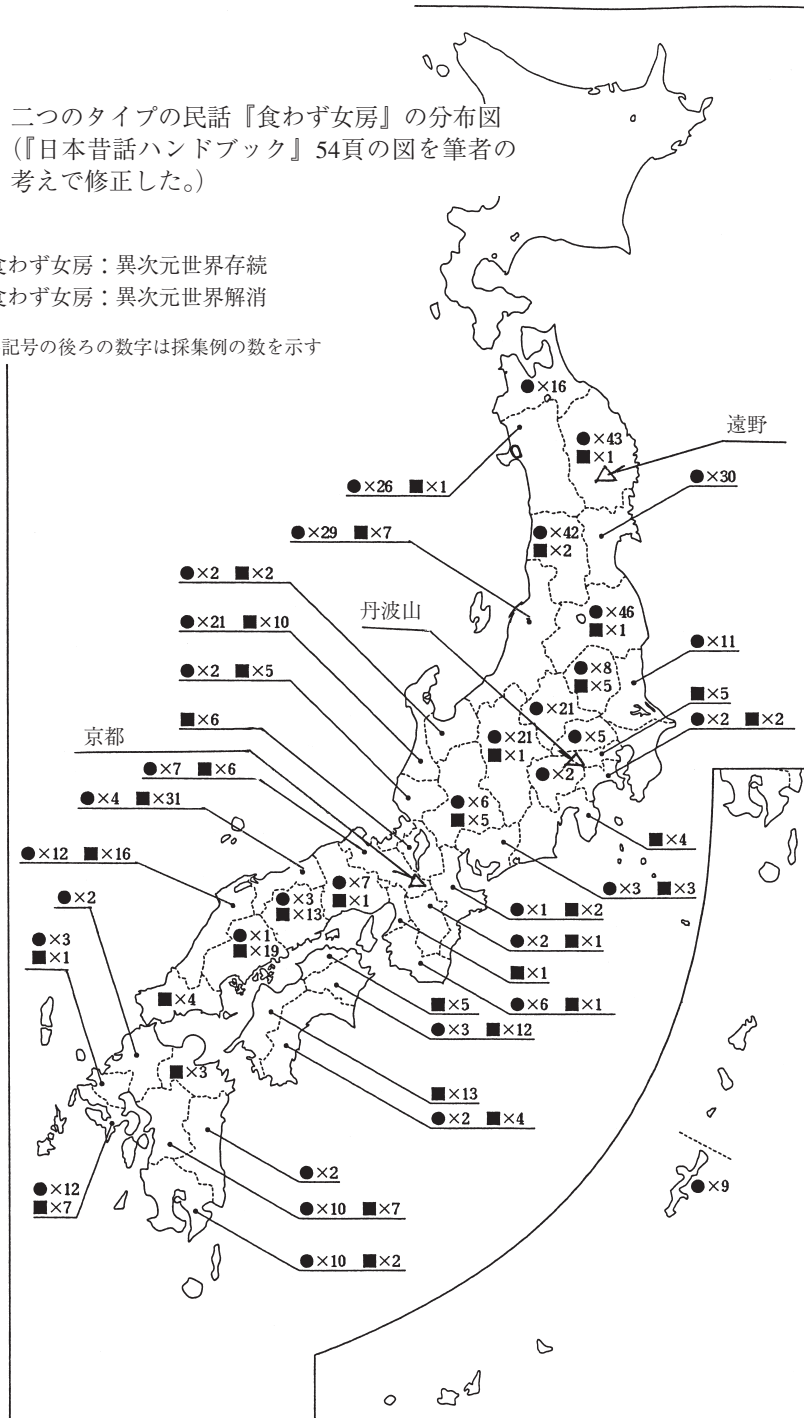
姥捨の消滅は、山姥の抹殺という形を採らざるを得なかった。それは、同時に異次元世界の消滅を意味した。畏敬の対象であった神聖な異次元世界は解消させられて、

図ー5 二つのタイプの民話『食わず女房』の分布図
 (『日本昔話ハンドブック』54頁の図を筆者の
 考えで修正した。)

●食わず女房：異次元世界存続

■食わず女房：異次元世界解消

※各記号の後ろの数字は採集例の数を示す



すべては人間世界（この世）の支配に組み入れられた。

丹波山村の民話『口のない山姥』は、全国に数多く残っている民話『食わず女房』の一つと考えて良いだろう。『食わず女房』という民話には二つのタイプがあると考えられる。一つは山姥あるいはその化生が抹殺されるタイプ、もう一つは生き残って元の山中に戻るタイプである。私の考えでは、前者は異次元世界が解消し、姥捨の消滅を意味するタイプであり、後者は異次元世界が存続し、姥捨が続いたことを意味するタイプである。図-5は、『日本昔話ハンドブック』（稲田浩二，和子編，三省堂，2002年）に収録された『食わず女房』系の分布図（同書54頁）を私の考えによって修正したものである。いずれの県でも両タイプが混在しているが、前者は中国・四国地方に多く、後者は東北地方に多い。そして、関東から近畿にかけては両者の中間という趣がある。特に、東海地方や北陸地方の沿岸地域は、中間的色彩が強いようである。ところが九州地方は、どちらかと言えば東北地方に似ているように思える。丹波山は、中間の最先端と位置付けることができるのではないだろうか。こういう色分けによると、京都と丹波山は前者、遠野は後者となる。私は、異次元世界の解消は、西日本から徐々に北上したと考える。おそらく、それは様々な交易活動を通じて、地域の経済力の向上と共に進んだのだろう。姥捨は、徐々に解消され、すべてが人間世界（この世）の支配下に置かれて行った。こうして、山姥も民話の中の昔話となったのである。